

今でもそうですが、あの体験をした当時、わたしはひどい気管支ぜんそくと気腫に苦しんでいました。ある日ぜんそくの発作を起こし、背骨の下の方の椎骨にひびが入ってしまいました。それから二か月間、痛みが苦しくて方々の医者にかかりました。そして最後に、医者の一とりが神経外科のワイアット博士を紹介してくれました。博士は診察後、直ちに入院しなければならぬと言いました。それで入院し、早速、コルセットをつけられました。

ワイアット博士はわたしが重症の呼吸器系の病気にかかっているのを知っていたので、肺の専門家を呼びました。その専門家は、麻酔を使用するのなら麻酔医のコールマン博士と相談すべきだと言いました。この専門家は約二週間にわたってわたしを検査してから、やっと麻酔医のコールマン博士にわたしをゆだねました。

博士はある月曜日にやっと同意したものの、わたしに麻酔をかけることを非常に心配していました。手術はその週の金曜に行われることになりました。月曜の夜、よく眠れぬままにうとうとしていたうちに、翌火曜の朝早く、大変な痛みで目が醒めました。寝返りをうって楽な姿勢になろうとしたのですが、その瞬間、病室の隅の天井のすぐ下に光が現われたのです。光の球体で地球儀によく似ていましたが、あまり大きなものではなく、せいぜい直径30センチから40センチたらずでした。この光が現われるとふしぎ

な気分におそわれました。薄気味悪かったものではありません。そんな感じではなかったのです。完全になごやかで、心底安らいだ気分になったのです。その光から手がさしのべられるのが見ええました。光は「わたしといっしょに來なさい。あなたに見せたいものがあります」といいました。そこですぐに、全然とまどうこともなくわたしは手をのびし、その手を握りました。握った瞬間に、ぐっとひきあげられ、自分の肉体から離れるのがわかりました。わたしは病室の天井に向かって登っているのに、ふり返ると自分の肉体がベッドの上に横たわっているのが見えました。

自分の肉体から離れたとたん、わたしは光と同じ形になりました。これはまぎれもなく魂なのだと思います。このようなことについて他人から話を聞いたことがないので、わたしなりの表現をするしかありません。あれは肉体ではありませんでした。煙かもやのかたまりにすぎないのです。明りの周囲をゆったり登っていくたばこの煙にとてもよく似ているように思えました。わたしになった丸い形には色がありました。オレンジ色、黄色、それに私の目にはとてもぼんやりと感じられた色——その色は、青味がかった藍色だったと思います。

この靈的形態は、人間の肉体のような姿や形はしていません。円形なのですが、手のようなものがあるのです。あの光がわたしに向かつてのびて来たので、それをつかもうと自分の手をのびしたとき、それが判りました。しかし、わたしの肉体の腕や手は、まったく動かずにいたのです。光の方へ向かって登っている時、

手と腕がベッドの上のわたしの肉体の両側にじっとしているのが見えたのですから、間違いありません。でも、この霊的な手を使っていないときは、わたしの靈魂は円形にもどっていました。

こうしてわたしは、その光のいる場所へ登っていきました。わたしたちは病室の天井と壁とを通り抜けて移動し、廊下を進み、さらに床を通り抜けて病院の階下に降りました。わたしたちが近寄ると、壁や床が目の前からふっと消えてしまったのです。

この間ずっとわたしたちは移動していたようです。自分たちが動いていることはわかりましたが、速度は全然感じませんでした。一瞬のあいだに、実際にあっと思ったとたん、わたしは回復室にいることに気づきました。でもそれまで、この病院のどこに回復室があるのか知らなかったのです。それなのにわたしたちはそこにいて、しかもまた、その病室の隅の天井近くから下を見おろしていたのです。緑色の服を着た医師や看護婦たちが動きまわっている様子がよく見えましたし、その部屋にあるいくつものベッドも見えました。

その時、あの光の生命が言いました——わたしに示したのです——「あなたはあのベッドに寝ることになります。手術台から降されるとすぐにあのベッドに寝せられるが、決して目を醒さないでしょう。あなたは手術室に入ってからは一切の意識を失い、しばらくのちにわたしがあなたの許にふたたびあらわれたときに、はじめて意識をとりもどします」。ところでわたしは、こういうことばで話しかけられたと言っているではありません。耳で聞

きとれる音声で話されたのではないのです。もしもそういう声を使ったのならあの病室にいた他の人々にも聞えたはずなのに、他の人々には聞えていなかったのですから。伝わってきた印象というほうがいいかもしれません。しかし、非常にはっきりと伝わってきたので、聞きとったのかも知れませんが、感じとった可能性も否定できません。いずれにせよ、ちゃんと伝わってきたのです。

わたしがなにを見ていたかというところ——そうです、この霊的狀態になっている時のほうが、物事をずっとたやすく認識できました。「光の生命はわたしになにを見せようとしているのだろう」などとは思いませんでした。この光が見せようとしていた物が何であるかが、たちどころに判ったのです。光の胸の内がわかったのです。疑いの余地はありませんでした。あのベッドだったのです——廊下から入ってすぐ右手にあるベッドです——わたしが寝

ることになるベッドだったのです。光はある目的を持って、わたしをそこへ連れていったのです。やがて、光の生命はその理由を話してくれました。わたしの靈魂が物理的肉体を離れる時が来て、もわたしが少しも恐れを感じないで欲しいし、その時点を通過する時の感覚を前もって知っておいて欲しかったからだというふうになわたしには受け取れました。光の生命は、わたしが恐れないように安心させたかったのです。というのもこの光の生命は、自分はずぐにはあらわれない、自分があらわれるまでに、あなたはいろいろなことを体験することになっているが、自分がすべてのことからあなたを守る、その後あなたの前にはあらわれる、と語り

かけたからです。

ところで回復室へ行くために、この光と合流し、わたし自身が靈魂と化したとたん、わたしたちはある意味でひとつに溶け合いました。もちろん別々に分れてはいました。でもこの光は、わたしのすべてを完全にコントロールしていたのです。壁や天井などを通り抜けて移動している時も、非常に密度の高い疎通があり、何物にも妨げられないような気がしました。そのうえ、他では決して感じられないような、平穩で落ち着いた、静かな感じがしました。

話し終ると、光の生命はわたしを病室へつれ帰りました。病室へもどった時、自分の肉体がまた見えました。わたしたちがこの病室から出て行った時と寸違わぬ姿勢で横たわっていました。そして一瞬のうちに、わたしは自分の物理的肉体の中に戻っていたのです。五分か十分くらいは肉体を離れていたように思いますが、時間的経過はこの体験には何の関係ありませんでした。事実、あの体験を実際の時間と結びつけて考えたかどうかさえも覚えていません。

こうした一切の出来事に、わたしはすっかり驚いてしまいました。まったく思いがけないことでした。通常の体験よりもずっと鮮明で現実的でした。でも翌朝にはすっかり落ち着きを取りもどしていました。ひげを剃っていた時、手が震えていないのに気づきました。この六週間か八週間ほどずっと震えていたのです。自分が間もなく死ぬことは判っていましたが、後悔も恐怖も感じま

せんでした。「死なないためにはどうしたらいいだろう？」などとは考えてもみませんでした。死に対する心の準備ができていたのです。

手術の前日の木曜の午後、わたしは病室で、思い悩んでいました。妻とわたしには、息子が一人いました。甥を養子にしていたのです。当時、わたしたち夫婦はこの息子のことでちょっとしためんどろにまきこまれていました。そこで妻と息子宛に一通ずつ手紙を書くことにしました。わたしは心配をしたため、手術が終るまではわからないような場所に隠しておくことにしました。妻宛の手紙を二ページほど書き進んだ時、突然、わたしはこらえきれなくなり、大声をだして泣き出してしまいました。誰かがそばにいる気配を感じました。最初は、わたしが大きな声で泣いたので看護婦が心配して、様子を見に来たのだろうと思いました。でも、ドアが開く音は聞えませんでした。そして再び、わたしはあの光の気配を感じたのです。でも今度は、光は全然見えませんでした。でも思いというかことが、前回とまったく同じように伝わってきたのです。「ジャック、どうして泣いているのだね？」

わたしの許へくることを喜んでいるものと思っていたのに」と言いました。「喜んでいますよ。ぜひいっしょに行きたいと思っています」と、わたしは思いました。するとその声が、「それならなぜ泣いているのだ？」といいました。そこでわたしは、「わたしたち夫婦は息子に手を焼いています。妻には息子の育て方がわからないのではないかとと思うと心配でならないのです。それで妻

宛に、わたしの考えと、息子のためにしてやってほしいと思うことをしたためていたところなのです。わたしが生きていたら息子も多少は落ちつくのではないかと思うと、これまた気がかりで、いろいろ案じていたのです」と話しました。

するとある思いが送られてきました。「ジャック、あなたは他人のためを思っているから、あなたの望みを聞き入れよう。息子が成人するまで、あなたは生き続けなさい」。こう言うと、あの靈魂は行ってしまいました。わたしは泣き止み、妻に手紙を見られたりしないよう、破ってしまいました。

その夜コールマン博士が病室を訪れ、わたしに麻酔をかけるのはおそらく非常に大変だろうと言いました。そして目を醒した時に、わたしのまわりに無数のワイヤーやチューブや器具があっても驚かないようにと言いました。わたしは自分が体験したことを博士に話しませんでした。わたしはただうなずいて、協力しますと言いました。

翌朝の手術には長い時間がかかりましたが、成功でした。意識を取り戻すとコールマン博士がつきそっていたので、わたしは「今自分がどこにいるのかちゃんと知っていますよ」と言いました。「どこのベッドにいるのですか？」と博士が言いました。わたしは、「廊下から入って右手の最初のベッドです」と答えました。博士は笑って相手にしませんでした。わたしが麻酔から醒めていない、と博士は思ったのです。

自分が体験したことを話したいと思ったのですが、ちょうどそ

の時、ワイアット博士が病室に入ってきて、「この患者はもう麻酔から醒めています。どうなさいますか？」と言いました。するとコールマン博士が言いました。「わたしにできることはひとつもありません。こんなにびっくりしたのは生まれて始めてです。こうやっていろいろな器具をセットしているのに、この患者には全く不要なのですから」ワイアット博士は「奇蹟は今だって起こるのです」と言いました。やがてベッドの上に起き上げるようになったとき、わたしは部屋を見回しました。何日か前にあの光が示したそのベッドの上にわたしは座っていました。

これは三年前のできごとですが、今でも当時のように鮮明に覚えていきます。あれはわたしの身の上に起こったことの中でも最もふしぎなことでしたし、あの体験によって、わたしは非常に変わりました。でも、わたしはあの体験については、話さないことにしています。妻と兄と牧師と、そして今、あなたに話しただけです。なんといいったらいいかわからないのです。非常に説明しにくいのです。あなたをびっくりさせてやろうと思っているわけではないし、自慢するつもりもありません。あの体験をしてからは、わたしは死後にも生命があることを少しも疑っていません。わたしはそのことを知っているのです。

かいまみた死後の世界 評論社 Raymond A. Moody, Jr.